

神奈川における縄文時代文化の変遷VII

—後期初頭期 称名寺式土器文化期の様相 その3 文化的様相(1)—

縄文時代研究プロジェクトチーム

I. はじめに

平成19年度は、一昨年度から開始した後期初頭期・称名寺式土器文化期の様相をめぐる研究の3年次目にあたる。今年度より新メンバー1名を加え、昨年度提示した「称名寺式土器編年試案」(縄文時代研究プロジェクトチーム2007)にもとづき、該期の文化的様相を探る研究活動に着手しているが、今回はまず、住居址(竪穴住居址・柄鏡形(敷石)住居址)及び住居址以外の遺構・貝塚、土製品、骨角製品といった土器以外の遺物等、称名寺式土器文化期の個別遺構・遺物についての検討を行うこととした。なお、諸般の事情により今回検討を見送った「屋外埋設土器」、「石器」、「石製品」については、該期集落の様相・分布、及び該期遺跡の地名表・文献一覧(補遺)とともに、「文化的様相(2)」として次年度の検討課題とする。 (井辺一徳)

II. 竪穴住居址・柄鏡形(敷石)住居址

1. 平面形態・規模

本プロジェクトで収集し得た当該期の住居址は37遺跡84軒になる。このうち、報告書等の事実記載、挿図から概要が比較的明らかになっている31遺跡61軒の竪穴住居址を対象とし、平面形態・長軸規模、敷石の有無等の検討をし、各段階の特徴を抽出することを試みた。

まず、時期の分別である。共伴する土器から時期が分別できるものについては、神奈川における「称名寺式土器編年試案」(前掲 縄文時代研究プロジェクトチーム)に基づいて分別した。また、土器の記載のないものや、分類ができなかったものについては「加曽利E～称名寺」「称名寺」「称名寺～堀之内」と大別した。「加曽利E～称名寺」については8遺跡9軒、「称名寺」については11遺跡21軒、「称名寺～堀之内」については6遺跡9軒を数えた。これらは時期が細かく特定できないため、検討対象から除外した。以下では12遺跡20軒を検討の対象とした。

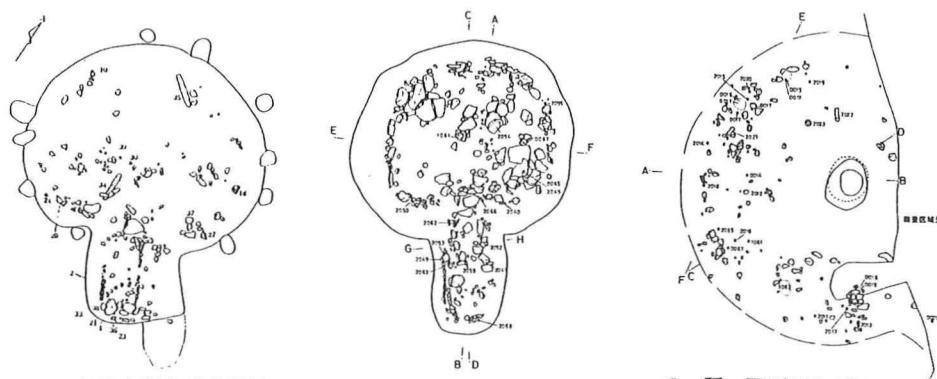
平面形態について細かく分析を試みた。加曽利E式IV期から急増した柄鏡形が、この時期を通じて顕著なことがまず挙げられる。それ以外は円形・楕円形に分類できたが、その中では大きな傾向は見られなかった。そこで、この時期の平面形態を「柄鏡形」と「円形・楕円形」の大きく2分類するに留めた。

それぞれの特徴について下記で検討した。

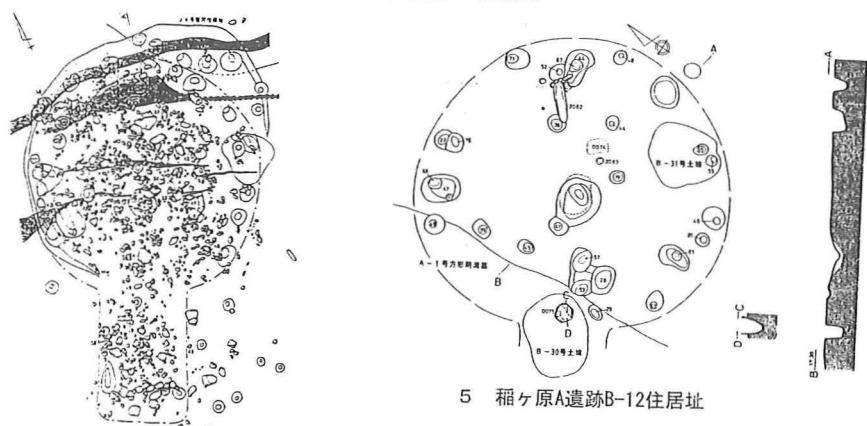
①円形・楕円形プランについて(第1図、第1表)

軒数と規模: 第1表にまとめた。軒数についてみてみると古段階前半と判別できたのは1軒のみ。古段階後半と判別できたものはなかった。中段階と判別できたのは1軒で、新段階では4軒が判別できた。規模について見てみると古段階前半で6.1mの住居(第1図3)が見られたが、中段階では4.7mの例(第1図8)のみ。新段階になると平均5.35mとなる。

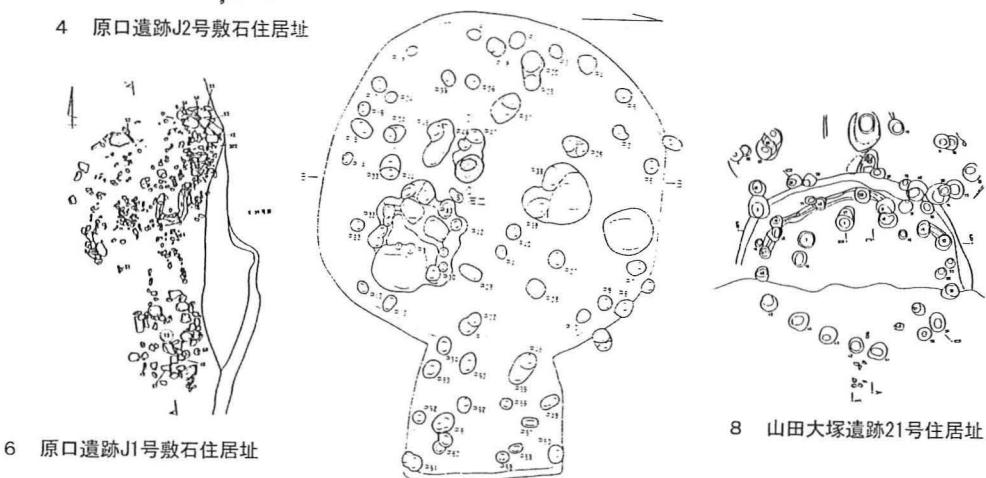
古段階前半



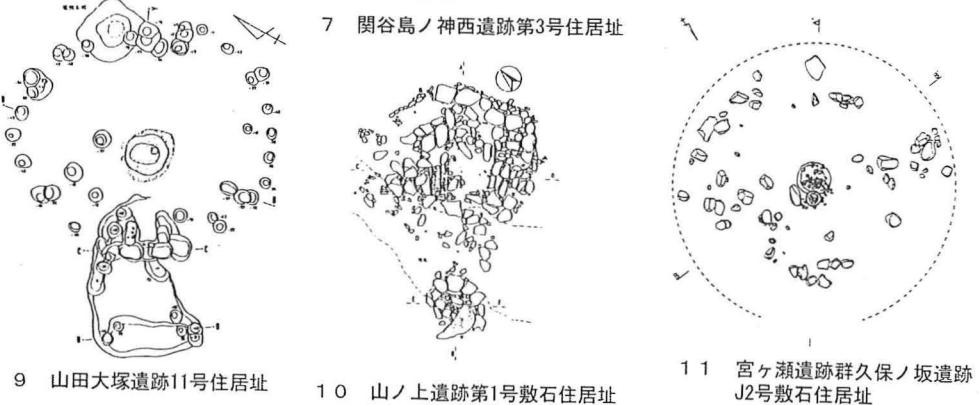
古段階後半



中段階



新段階



第1図 称名寺の竪穴住居址 (1/150)

敷石について：古段階前半では1軒(第1図3)敷石が見られるが、中段階の住居では敷石が見られない。新段階では4軒中1軒(第1図11)のみで検出されている。敷石が施されている住居の検出された地域は横浜市で2軒、清川村で1軒と、県東部・県央部に見られた。但し、敷石の見られない住居も横浜市で3軒見られた。県東部では敷石のない例の方が多い傾向が見られるといえるであろう。

また今回、円形・楕円形等としたものでも、確認できたプランが円形であって、本来は張り出し部が存在した可能性も考えられるものもあるであろう。

②柄鏡形プランについて（第1図、第2表）

軒数と規模：第2表にまとめた。中段階と判別できたものが多く見られた。規模について見てみると、古段階前半から後半、中段階までは規模にばらつきがみられ、鎌倉市関谷島ノ神西遺跡第3号住居址（第1図7）が長軸長9.05mと突出する例も見られる。新段階になるとやや小型化する傾向が見られる。張り出し部に着目すると、古段階前半から後半になると、幅はそのままで長軸は長くなる。中段階になると長軸は短くなるが幅は広がりを見せる。しかし新段階になると長軸と幅ともに小型化する傾向が見られる。特に幅の減少が著しい。主体部は円形、もしくは楕円形基調となる。

敷石について：古段階前半・後半では全てにみられるが、中段階・新段階では敷石のないものもみられる。敷石の配置をみると、礫を壁柱穴や壁の内側に沿って中小の礫を配するもの(周礫タイプ:第1図1・4・5・9)と板石を床に面状に敷いたもの(面状敷石タイプ:第1図2・6・10)の大まかに2つに分類することができた。地域で分類すると県東部は周礫が、県央部は面状が多い傾向が見られた。これは加曾利Eの時期と同様の傾向であり、川の流れの緩やかな県東部では板石の入手が困難な事情を反映しているものと考えられる。古段階前半では全てにみられるが、古段階後半では6割、中段階では5割と比率は減少するが、新段階になると8割弱まで増加する。

掘り込みについて：床面より上の掘り込み(床上掘り込み)は多くの例が見られた。床上掘り込みは30cm程度と一般的に浅い。床下の掘り込み(掘り方)については床上掘り込み程多くは見られなかった。また周礫タイプ・面状敷石タイプのどちらかに多いという傾向は見られなかった。

③円形・楕円形プランと柄鏡形プランを通じて

全段階を通して、住居の主軸についての検討を試みたが、特に傾向は見出せなかった。集落内で占位する位置を考慮しての検討が必要であろう。

(宗像義輝)

第1表 円形・楕円形住居の軒数・規模(平均値)

	敷石あり	敷石なし	住居長軸長
古段階前半	1軒	0軒	6.1m
古段階後半	0軒	0軒	—
中段階	0軒	1軒	4.7m
新段階	1軒	3軒	5.35m
計	2軒	7軒	5.37m

第2表 柄鏡形住居の軒数・規模(平均値)

	敷石あり	敷石なし	住居長軸長	出張部長	出張部幅
古段階前半	3軒	0軒	6.0m	1.8m	1.7m
古段階後半	2軒	0軒	6.8m	2.6m	1.77m
中段階	4軒	2軒	6.1m	2.25m	2.28m
新段階	2軒	1軒	4.86m	1.8m	1.3m
計	11軒	3軒	5.16m	1.94m	2.05m

2. 炉址・壁下構造・埋甕

ここでは、神奈川県内で発見された該期竪穴住居址・柄鏡形(敷石)住居址のうち、報告書等に挿図や概要が示されている28遺跡55軒(10市1町1村に分布)を対象とし、炉址形態、壁下構造、埋甕等についてみていく。本来であれば、前年度に提示した細分段階別に様相・変遷等の分析を行うべきであるが、対象となる住居址の絶対数が少ないため、各段階別の傾向等については必要に応じ文中で触れていくこととする。

①炉址形態（第2図1～3）

炉址形態を把握することができた住居址は25遺跡47軒存在する。形態的には、地床炉（31軒：約66.0%）、石囲炉（11軒：約23.4%）、埋甕炉（1軒：約2.1%）の3形態が確認されており、炉自体が構築されていないと考えられる住居址も4軒（約8.5%）存在する。第2図に各形態の代表的な事例を掲載した。

地床炉が確認された住居址は16遺跡31軒存在する。このうち23軒が横浜市域に所在する遺跡において発見されたもので、県東域への高い偏在傾向が窺える。時期判別が可能なものの内訳は、古段階に帰属するものが7軒（約22.6%）、中段階に帰属するものが11軒（約35.5%）、新段階に帰属するものが7軒（約22.6%）となっており、一昨年度の「住居址一括出土事例」、昨年度の「編年試案」等で取り上げた代表的な遺跡（住居址）では、古段階前半にあてた横浜市緑区松風台遺跡3号住居址、古段階後半にあてた横浜市緑区稻ヶ原遺跡A地点B-4・12号住居址、藤沢市用田鳥居前遺跡J2号竪穴住居址（第2図1）、中段階にあてた横浜市港北区山田大塚遺跡21号住居址、新段階にあてた中井町東向遺跡2号住居址等が挙げられる。

石囲炉が確認された住居址は11遺跡11軒存在する。相模原市に5遺跡5軒、座間市、清川村に各1遺跡1軒が分布し、地床炉を有する住居址の分布とは異なり、県央部相模川水系中流域への偏在傾向が捉えられる。時期判別が可能なものの内訳は、古段階に帰属するものが5軒（約45.5%）、中段階に帰属するものが3軒（約27.3%）、新段階に帰属するものが1軒（約9.1%）となっている。時期的に下るほど減少する傾向にあるようにも思われるが、集計対象となる住居址の絶対数が少ないため断定は避ける。一昨年度の「住居址一括出土事例」、昨年度の「編年試案」等で取り上げた代表的な遺跡（住居址）では、古段階にあてた相模原市下溝上谷開戸B地区第3号住居址（第2図2）、同市下溝鳩川遺跡B地区1号住居址（古）、中段階にあてた平塚市原口遺跡J1号敷石住居址等が挙げられる。

埋甕炉が確認された住居址は、確実なものとしては清川村に所在する宮ヶ瀬遺跡群久保ノ坂遺跡J2号敷石住居址（第2図3）を抽出し得たのみである。同住居址の埋甕炉は浅い皿状の掘り込みとその脇に設置された炉体土器によって構成されるもので、炉体土器は、昨年度の「編年試案」で新段階に相当する資料として補足図に掲載した良好な資料である。第2図から分かるように、炉体土器の脇には炉石を思わせる大形礫が据えられている。報告書によればこれらは同時に機能していたもののように、とすれば、当該炉址は、石囲埋甕炉であった可能性も考えられる。なお、山北町尾崎遺跡第11号住居址は、称名寺式と思われる炉体土器を有する石囲埋甕炉が確認されている。報告書によると、同住居址は中期後葉期の所産とされているため今回は取り上げなかったが、久保ノ坂遺跡の事例とともに留意されるものである。

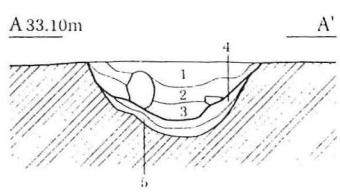
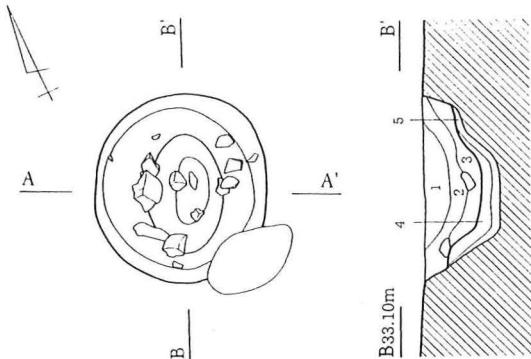
②壁下構造（第2図4・5、第3図6・7）

周壁下の施設等が捉えられた住居址は26遺跡45軒存在する。形態的には、周（壁）溝が廻るもの（2軒：約4.8%）、壁柱穴が廻るもの（31軒：約73.8%）、両者併用のもの（1軒：約2.4%）の3形態が確認されており、特段の施設等が施されていない住居址も8軒（約19.0%）存在する。第2・3図に各形態の代表的な事例を掲載した。

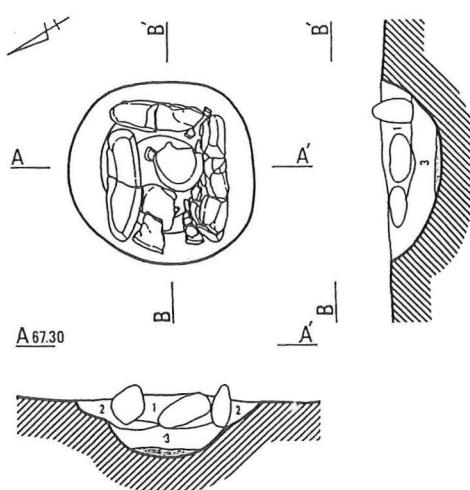
周（壁）溝が廻る住居址は、横浜市港北区篠原大原遺跡第39号住居址、中井町東向遺跡2号住居址（第2図4）の2軒を確認した。第2図に掲載した後者はやや断続的な周（壁）溝が円形に廻るもので、4～5本で構成される主柱穴が配されている可能性もある。昨年度に提示した「編年試案」からも分かるように、当該住居址は出土遺物に中段階のものと新段階のものが混在しており、時期決定が難しい。

壁柱穴が廻る住居址は、平塚市原口遺跡J4号竪穴住居址等、円形基調の竪穴住居址もあるが、横浜市緑区松風台遺跡JT-3、同稻ヶ原遺跡A地点B-4号住居址（第2図5）に代表されるように、大半は柄鏡形の形態を

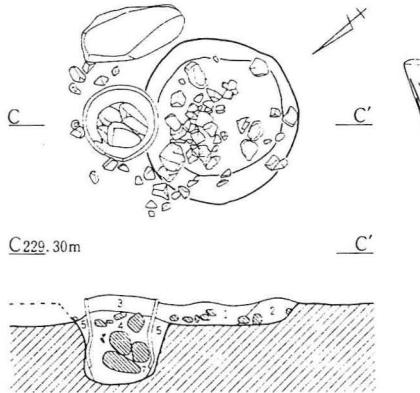
1. 藤沢市用田鳥居前遺跡 J2号竪穴住居址地床炉



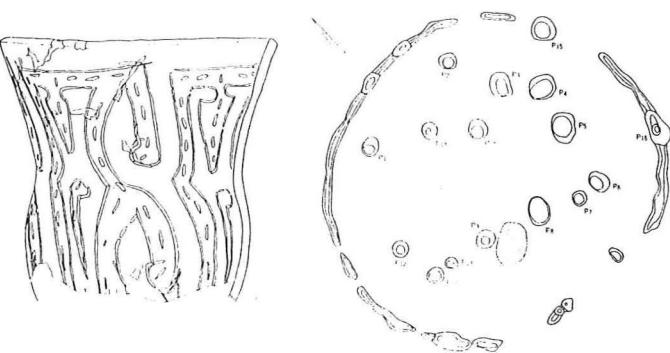
2. 相模原市下溝上谷開戸 B地区第3号住居石囲炉



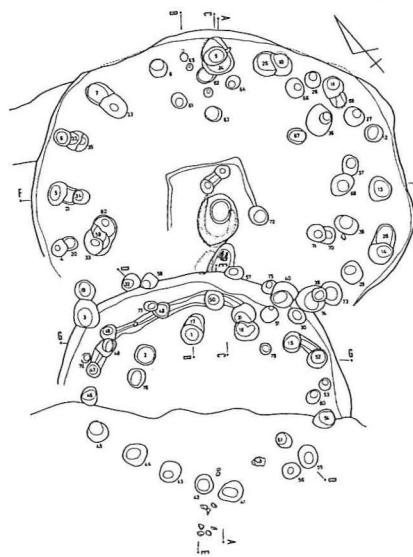
3. 清川村宮ヶ瀬遺跡群久保ノ坂遺跡 J2号敷石住居址埋甕炉及び炉体土器



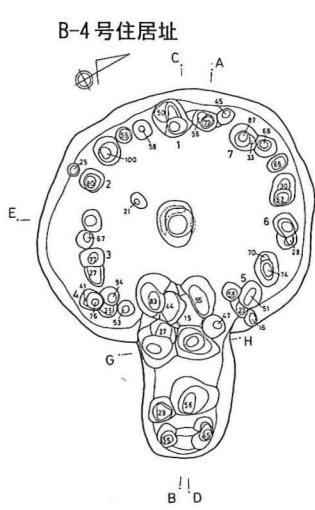
4. 中井町東向遺跡 2号住居址



6. 横浜市港北区山田大塚遺跡 21号住居址

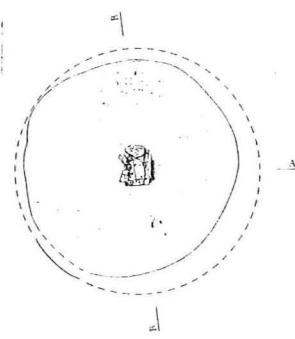


5. 横浜市稻ヶ原遺跡 A地点



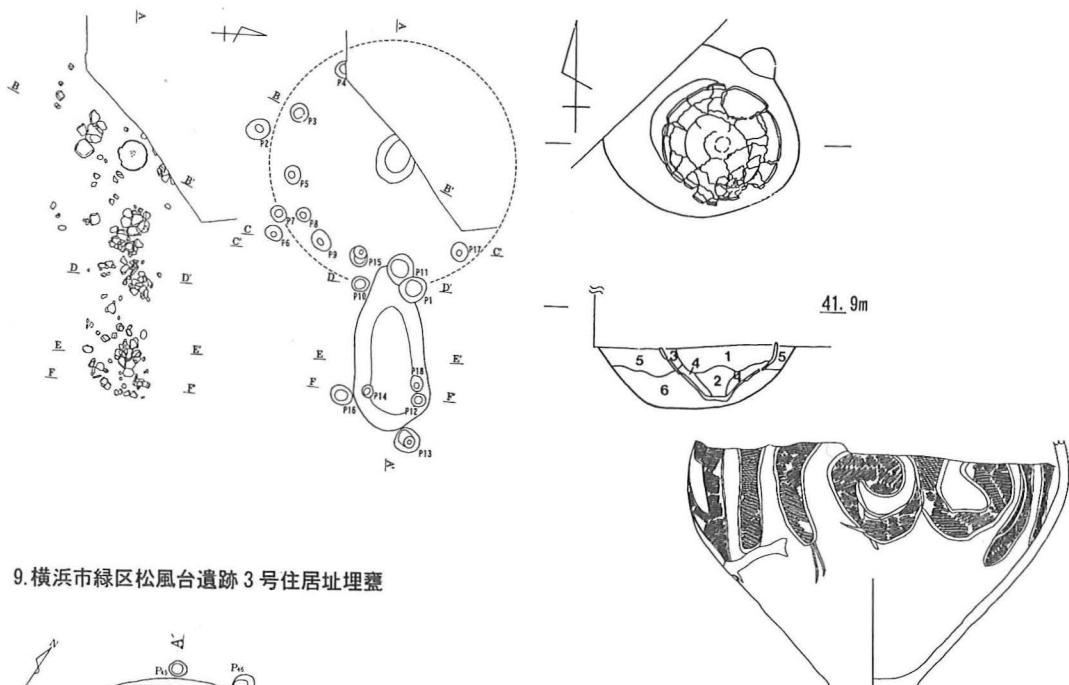
7. 藤沢市用田鳥居前遺跡

J1号竪穴住居址

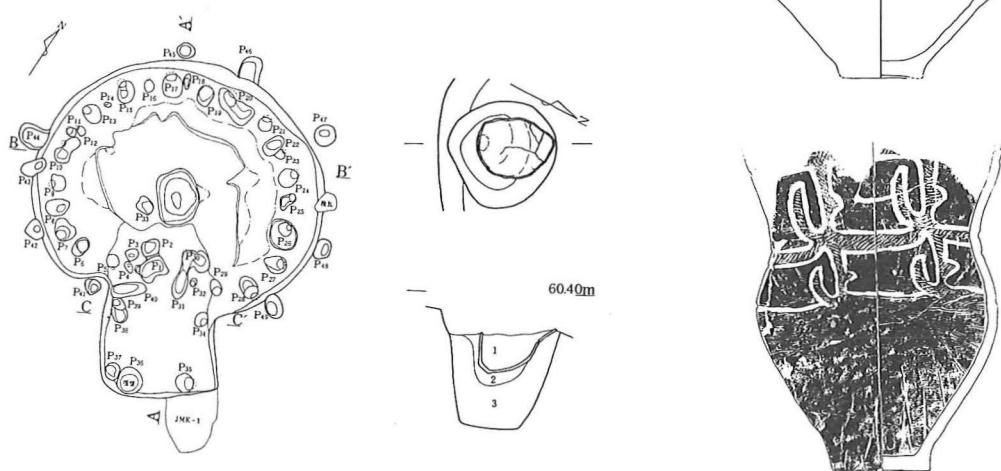


第2図 称名寺式期住居址形態・壁下構造・埋甕① (住居址 1/120 炉 1/30 土器 1/8)

8. 川崎市中原区井田中原遺跡 B 地点 JT-1 埋甕



9. 横浜市緑区松風台遺跡 3号住居址埋甕



Wall Type	Percentage
壁柱	73.8%
無し	19.0%
併用	2.4%

Heating Method	Percentage
地床炉	66.0%
石団炉	23.4%
埋蔵炉	2.1%
炉無し	8.5%

A pie chart illustrating the distribution of two categories. The '無し' category, representing 78.9%, is the majority and is shown in a light gray dotted pattern. The '有り' category, representing 21.1%, is a smaller slice shown in a dark gray diagonal striped pattern. The percentages are labeled next to their respective slices.

Category	Percentage
有り	21.1%
無し	78.9%

爐址形態 (47)

壁下構造(42)

埋甕(38)

第3図 称名寺式期住居址形態・壁下構造・埋甕②(住居址1/120、炬1/30、土器1/8)

とる。時期判別が可能なものの内訳は、古段階に帰属するものが10軒（約32.3%）、中段階に帰属するものが11軒（約35.5%）、新段階に帰属するものが8軒（約25.8%）となっており、時期による大きな変動はみられない。

周（壁）溝と壁柱穴が併用されている住居址は、確実なものとして横浜市港北区山田大塚遺跡21号住居址（第3図6）を確認したのみである。中段階に帰属すると考えられる同住居址では、壁柱穴は主体部に全周するものの、周（壁）溝は奥壁側への部分的な施設にとどまっているようである。また、詳細が判然としなかつたため今回の集成・集計対象からは外したが、称名時式期の住居址とされる横浜市港北区二ノ丸遺跡においても、周（壁）溝、壁柱双方が施設されている住居址が複数軒検出されているようである。横浜市域あるいは県東部における特徴と言えるかどうかは分からぬが、留意しておきたい事実である。

周壁下に特段の施設を設けない住居址は7遺跡8軒存在する。横浜市保土ヶ谷区帷子峯遺跡13号住居址、藤沢市用田鳥居前遺跡J1号堅穴住居址（第3図7）等に代表されるが、報告書によると、帷子峯遺跡13号住居址は4穴の柱穴が配される住居址のようで、主柱穴が確認された数少ない該期住居址のひとつである。

③埋甕（第3図8・9）

埋甕が検出された住居址は7遺跡8軒存在する。横浜市緑区松風台遺跡3号住居址（第2図9）、同稻ヶ原遺跡A地点B-12号住居址、川崎市中原区井田中原遺跡B地点JT-1（第2図8）、相模原市当麻遺跡第6号敷石住居址等に代表されるもので、時期判別の可能なものの内訳は、古段階に帰属するものが3軒、中段階に帰属するものが2軒、新段階に帰属するものが1軒となっている。

埋甕の施設位置は、大半のものが柄鏡形（敷石）住居址の張出部突端に設置されているが、川崎市中原区井田中原遺跡B地点JT-1のように、主体部に設置されるものも2軒存在するようだ。井田中原遺跡B地点JT-1は、柄鏡形（敷石）住居址主体部の中央部にJ字文の施された深鉢が埋置されるものである。当該埋甕は、一見埋甕炉にも見受けられるが、報告書によれば、土器内に焼土・炭化物がみられないことから埋甕（埋設土器）として取り扱われているようだ。

（井辺一徳）

III. その他の遺構

1. 堅穴状遺構

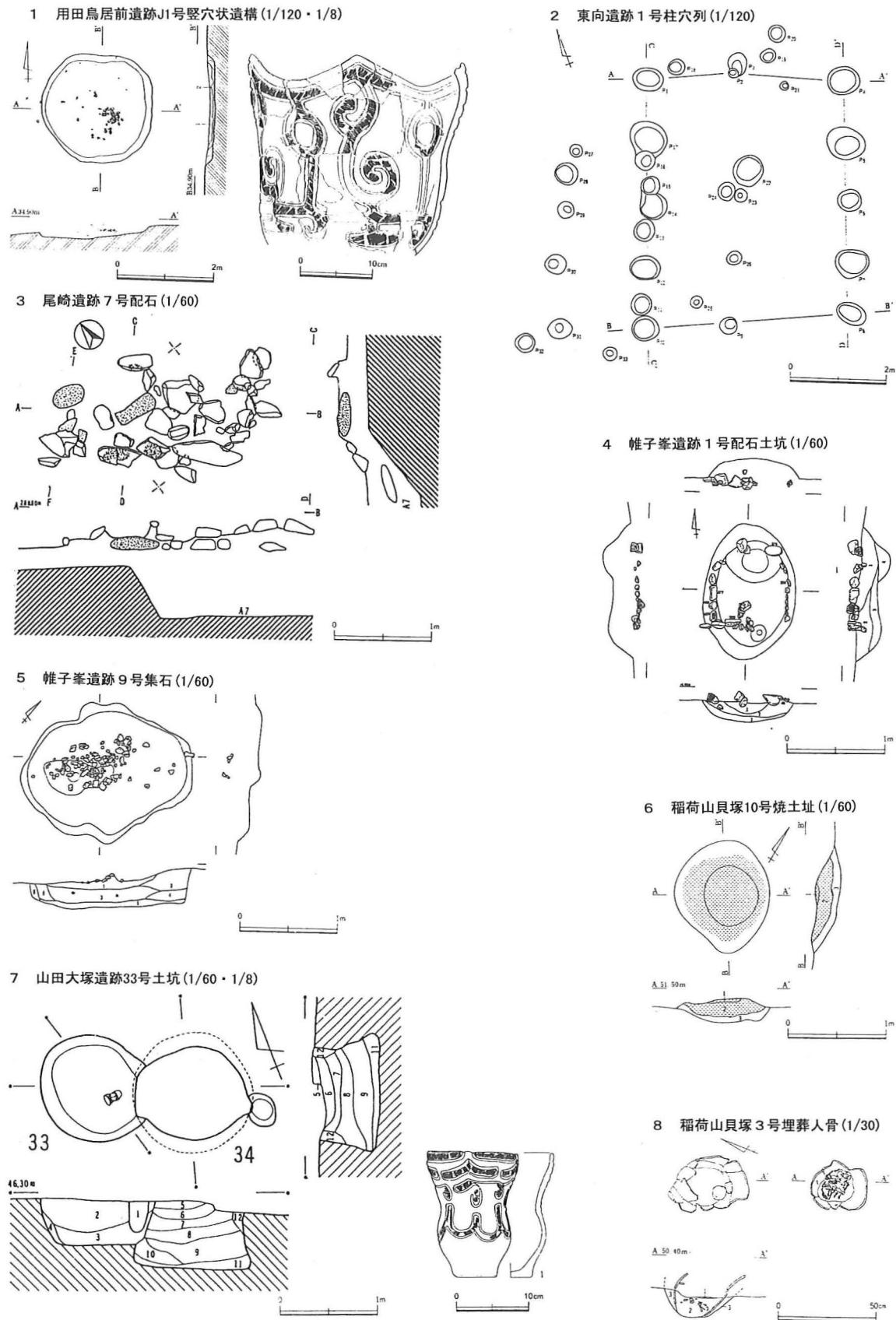
堅穴状遺構として報告されたものに藤沢市用田鳥居前遺跡の2基がある。平面形は円形もしくは不正橿円を呈し、長径約2.3～2.5mの小堅穴で、床面に炉やピットをもたない。遺物は覆土中層に集中する。J1号堅穴状遺構（第4図1）からは古段階後半に帰属する称名寺式土器が出土している。

2. 柱穴列・ピット群

該期の柱穴列として中井町東向遺跡で1基、ピット群として横浜市旭区小池遺跡に1基が報告されている。東向遺跡1号柱穴列（第4図2）は4間2間の掘立柱建物址状に柱穴が並ぶ。その規模は長軸5.3～5.6m、短軸4.7～4.8mと該期の堅穴住居址の規模に近い。小池遺跡のピット群は6穴が不規則に配置するものでその性格は明らかではない。

3. 配石遺構・配石土坑

下部に掘り込みをもたないものと掘り込みをもつものがある。前者を配石遺構とし、後者を配石土坑とし



第4図 称名寺式期の各種遺構

て報告する傾向がある。該期の配石遺構として東向遺跡2基、相模原市(旧津久井町)青根上野田遺跡1基、同市(旧城山町)川尻遺跡1基、平塚市真田大原遺跡1基、山北町尾崎遺跡2基があり、配石土坑には相模原市下溝鳩川遺跡1基、横浜市保土ヶ谷区帷子峯遺跡1基がある。配石遺構の規模や形状は、大型礫3点と小型礫からなる小規模なもの(東向遺跡第1号配石)、9m×5.5mの範囲に展開し中心に礫が集中するもの(真田大原遺跡配石遺構)、6.7mにわたり列状をなすもの(青根上野田遺跡J1列石)など様々である。中でも、東向遺跡2号配石は6点の大型礫が径1m程の円形に配され、尾崎遺跡第7号配石(第4図3)は、土坑状の掘り込みの上面に礫の平坦面をそろえて敷き詰めたように礫がまとまる。配石土坑は径1.5m程の円形もしくは楕円形の掘り込み内に礫を配するものである。特異なものとして、帷子峯遺跡1号配石土坑(第4図4)で比較的小型の礫が土坑の掘り込みの内側に沿って列状に配されている。

4. 集石

集石は、配石土坑に類するが、礫が覆土の上位から中位にかけ分布し、小型の礫が充填されているものをさす場合が多い。該期の集石として、帷子峯遺跡6基、厚木市御屋敷添遺跡第4地点3基が報告されている。御屋敷添遺跡第3号集石、第5号集石を除き下部土坑を有する。礫の広がりや下部土坑の規模は、帷子峯遺跡9号集石(第4図5)を除き1m未満の小型のものである。礫も拳大の小振りなものからなる。

5. 焼土址

該期の焼土址として清川村宮ヶ瀬遺跡群馬場(No.6)遺跡2基、同村宮ヶ瀬遺跡群北原(No.9)遺跡1基、青根上野田遺跡11基、東向遺跡1基、横浜市南区稻荷山貝塚2基(第4図6)を数える。径1m未満の範囲に焼土が広がるもので、青根上野田遺跡を除き皿状の掘り込みの中に焼土層が形成されている。いわゆる屋外炉としての機能が想定される。

6. 土坑

該期の土坑は、帷子峯遺跡、横浜市港北区篠原大原遺跡、同区山田大塚遺跡、横浜市戸塚区上倉田遺跡第II遺跡、横浜市都筑区小丸遺跡、同区川和向原遺跡、横須賀市吉井城山遺跡、相模原市(旧相模湖町)寸嵐一号遺跡・寸嵐二号遺跡、同市(旧津久井町)青根馬渡No.2遺跡、同市上中丸遺跡、川尻遺跡、東向遺跡で報告されている。平面形は円形基調が主で、他に不正円形や楕円形を呈するものがある。径1m未満で深さ0.3~0.5mの規模のものがほとんどであるが、山田大塚遺跡(第4図7)、川和向原遺跡、篠原大原遺跡にて坑底径が1mを超え、深さが1.5mを超えるフラスコ状土坑が発見されている。中には坑底の中央をさらに掘りくぼめ二段掘りを呈するものが含まれる。貯蔵穴としての機能が想定される。一方、青根馬渡No.2遺跡J1号土坑は長径2m程の長楕円を呈し、中央から横倒しにして押しつぶされたように出土した新段階の深鉢が発見されている。墓坑としての機能が想定されよう。

7. 埋葬人骨

該期の埋葬人骨として稻荷山貝塚3号埋葬人骨(第4図8)がある。3号埋葬人骨は、口縁を上にして斜位に埋設された深鉢に人骨が収められたもので、胎児ないし新生児骨とされる。深鉢は称名寺式新段階後半に相当する。

(阿部友寿)

IV. 貝 塚

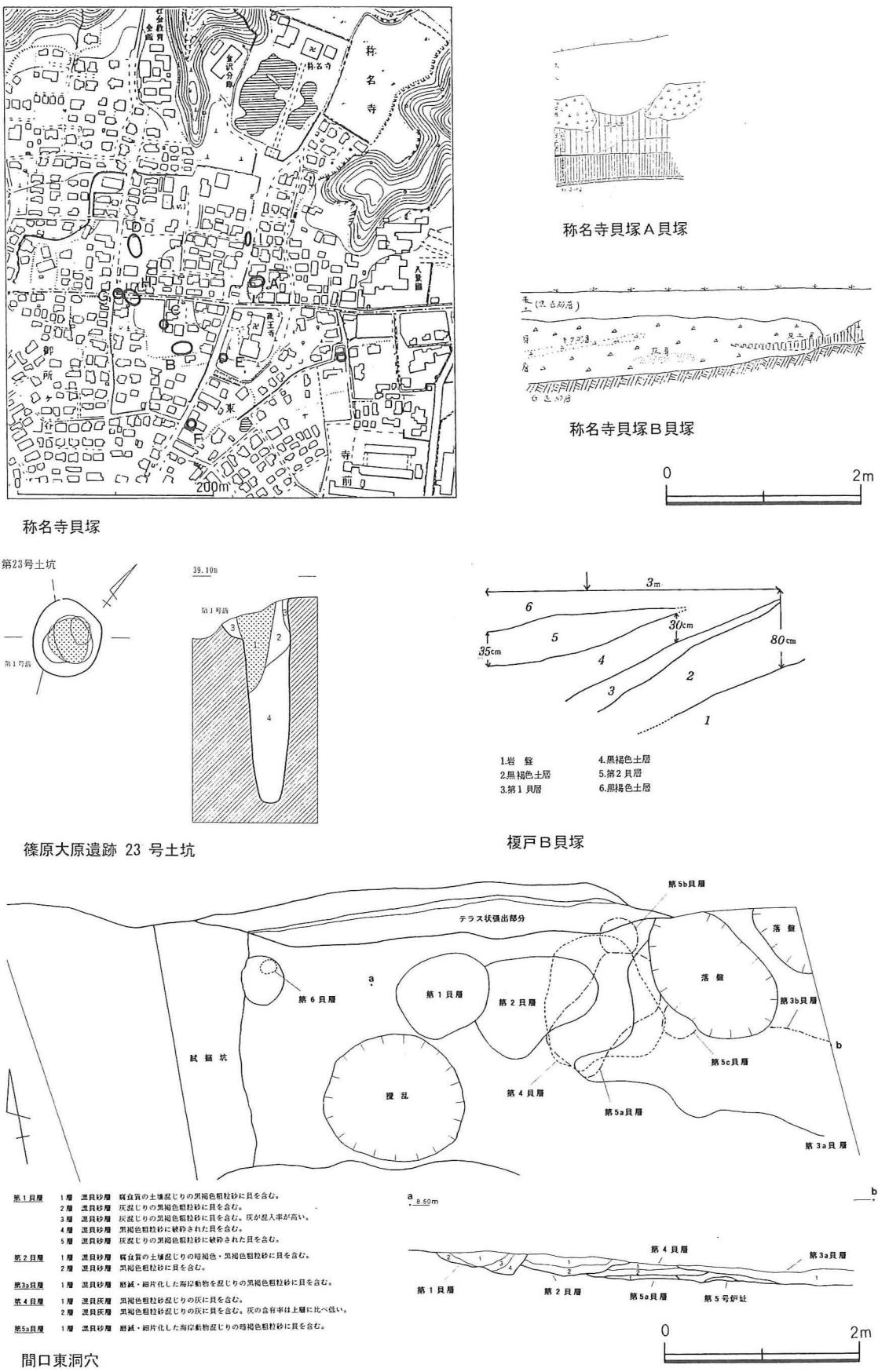
後期初頭の貝塚としては横浜市港北区篠原大原遺跡、同市金沢区称名寺貝塚、横須賀市榎戸B貝塚、三浦市間口東洞穴などがある。該期の特徴をあげると、分布が横浜から三浦半島の東京湾沿岸に多いこと、三浦半島の貝塚は岩礁性貝類が主体をなし、それ以外の貝塚では内湾砂泥底性貝類が主体であること、他の時期に比べマダイ・マグロなどの外洋性魚類やイルカなどの海獣類の捕獲が多く、外洋へ出た活発な漁労活動の存在が想定されること、などがある。

篠原大原遺跡 港北区篠原町にあり、標高約39~42mの台地上に位置する。貝層は台地縁辺の緩斜面に分布。該期のものでは土坑内貝層(23号土坑)(第5図)があり、称名寺式新段階の土器が出土している。同遺構の貝類は12種確認され、イボキサゴが最も多く、それにオキシジミ・ハマグリが次ぐ(第6図)。内湾砂底性貝類が主体で、内湾泥底性や汽水性貝類は極僅かであった。獣魚骨ではマアジ・タイ科、イノシシの骨が出土した。また32号土坑内貝層も該期の可能性がある。この他2号住居址内貝層・20号土坑内貝層からも称名寺式土器は出土しているが、堀之内1式土器を出土しているので、堀之内1式期に下ると思われる。

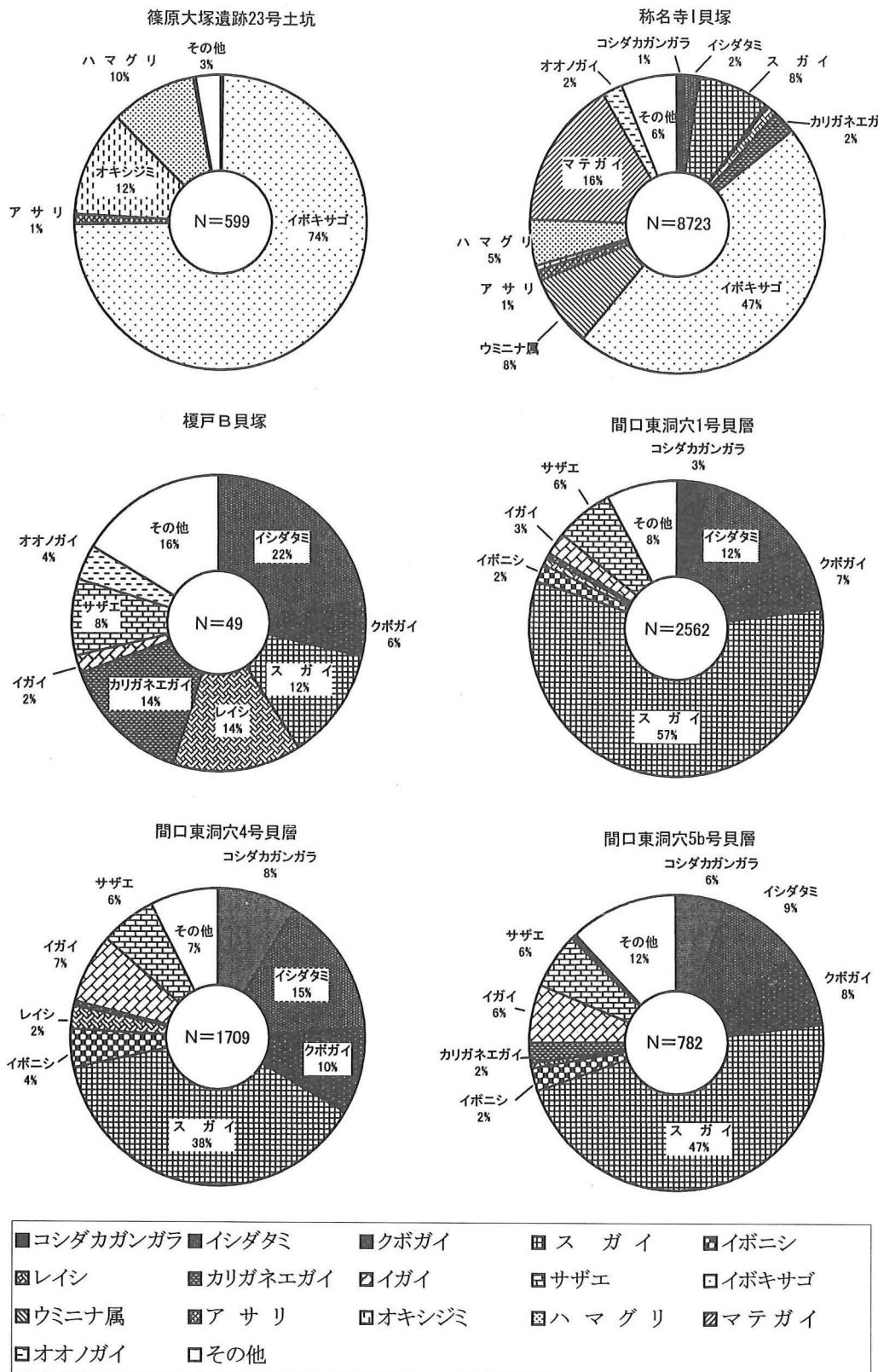
称名寺貝塚 金沢区称名寺境内からその周辺一帯に広がる貝塚。砂丘上、標高約5~8m付近にある。現在貝塚はA~I貝塚の9ヶ所の地点貝塚からなる。F地点以外は径約130mの範囲内に環状をなすように分布している(第5図)。F貝塚は中世、G貝塚は近世の貝塚である。該期の貝塚はA・B貝塚・D貝塚北側・H貝塚・I貝塚である。A貝塚は上部貝層が該期の所産で、層厚は約0.2m。下部貝層は加曾利E式期。貝類はオキシジミ・マガキ・ハイガイなど鹹水性貝類24種が存在した。魚類はマダイ・クロダイ・スズキ・マグロなど、鳥類はカラス・キジ、哺乳類はイノシシ・シカ・マイルカ・クジラなどが出土した。時期は称名寺式の古段階が主体。B貝塚は第1貝層(上層)が層厚0.4m。貝類はハマグリ・オキシジミ・アサリ・ツメタガイ・キサゴなど鹹水性貝類35種、魚類はマダイ・クロダイ・マグロ、哺乳類はイノシシ・シカ・マイルカ・クジラなどが出土した。第2貝層(下層)は層厚0.2~0.3m。貝類はハマグリ・アサリなど23種、魚類はマダイ・クロダイ、哺乳類はイノシシ・シカ・サル・マイルカが出土した。時期は称名寺式の新段階が主体であるが、堀之内式土器も少し出土している。I貝塚は層厚0.8m。貝類は鹹水性貝類32種出土。イボキサゴ・ウミニナ・マテガイなどの砂底性貝類が主体であったが、スガイなど岩礁性貝類も存在した(第6図)。同地点の貝1区の貝類を層位的に見ると下層にイボキサゴ主体層、中層はマテガイやスガイ・ウミニナなどが多い層があり、上層にイボキサゴが多い層が存在する傾向が見られた。魚類ではボラが最も多く、マダイ・クロダイが次ぎ、小形魚ではマイワシが多かった。哺乳類ではサル・イヌ・イノシシ・シカなどがあった。時期的傾向について見ると、称名寺式土器古、中、新段階および堀之内1式が層位的に出土した。各地点を通じてマイルカなどの海獣骨の存在が特徴的であった。

榎戸B貝塚 横須賀市浦郷町に所在する。斜面貝塚。貝層は厚さ約20cmと約35cmの2枚の貝層が重なっていた(第5図)。遺物は称名寺式の各段階を含んでおり、該期の貝塚である。貝類は鹹水性貝類13種が確認された。イシダタミ・クボガイ・スガイ・レイシ・カリガネエガイ・サザエなど岩礁性貝類が主体をなす(第6図)。魚類はマイワシなどの回遊魚の他、マグロ・マダイといった外洋性魚類、カンダイ・カサゴの岩礁性魚類があり、鳥類ではヒメウなどの水鳥、哺乳類ではマイルカ・バンドウイルカが多かった。

間口東洞穴 三浦市南下浦町松輪、東京湾に面した海蝕洞穴内にある。標高約8m。該期の貝層は4ヶ所存在した(第5図)。第1・6貝層は土坑内貝層、第4貝層は1.4×1.1m、層厚0.13m、第5b貝層は0.56×0.46



第5図 称名寺式期の貝塚



第6図 称名寺式期貝塚の貝類組成

m、層厚0.1mの面的な貝層である。貝類は第1貝層が45種、第4貝層が34種、第5b貝層が42種、第6貝層が15種と種類が多くなった。みなスガイが最多で、他にイシダタミやクボガイ・サザエなどが多く、殆どが岩礁性貝類である(第6図)。魚類はマダイが多く、他に外洋性魚類(サメ)・回遊性魚類(サバ)・岩礁性魚類

(ウツボ・カワハギ) がやや目立った。鳥類やイルカを含む哺乳類は極僅かであった。 (松田光太郎)

V. 土製品・骨角製品

1. 土製品

本項では称名寺式期の土製品について非常に簡単にではあるが概要を記した。項目にあげた土製品の多くは属性に乏しく、編年案の各段階(古~新)への設定が困難なため、遺構外出土の遺物は極力除外し、当該期の遺構から出土した遺物を取り扱うこととした。

①土器片錐(第7図1~5)

形態は長方形や楕円形の土器片の長軸方向に浅い切り込みを加えているものが多い。土器片の部位や縦横の取り方に顕著な傾向は見られない。時期は、中・新段階に比定される。分布は、県東部の沿岸部に集中する傾向が認められる。

②土製円盤(第7図6~10)

形状は、円形・不整円形を呈しており、大きさもまちまちである。時期は、中・新段階に比定される。分布は、県東部から県北西部に認められる。

③ミニチュア土器(第7図11~20)

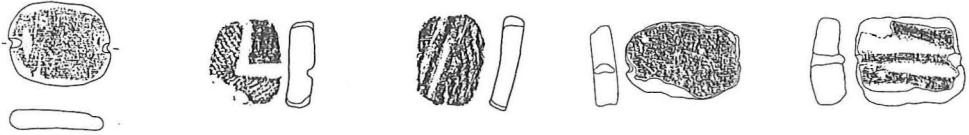
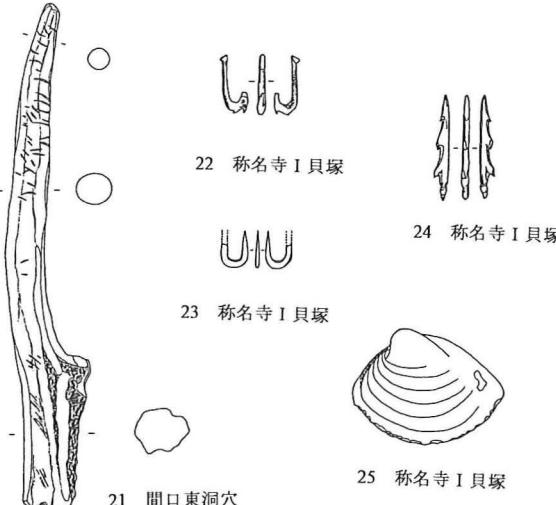
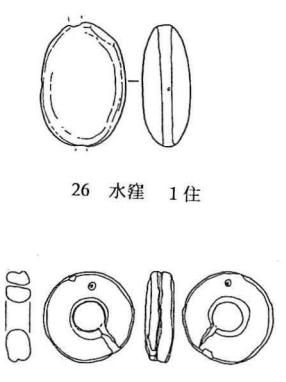
ここでは手捏土器などを含めた器高や最大径が約10cm以下の小形土器を取り扱うこととする。古段階に比定されるもの(第7図11~13)は、小さいながらも丁寧に作成されている。それに対して、中・新段階に比定されるもの(第7図14~17)は、粗雑に作成された無文土器がほとんどである。また、ミニチュア土器に含めはあるが、第7図18~20は、蓋形土器である。時期は、18が古段階、19・20が中段階に比定される。分布は、県東部から出土している。

④その他の土製品(第7図26・27)

上記以外の土製品として遺構内の出土に限って列挙しておく。第7図26は、横浜市都筑区水窪遺跡1住から出土している楕円形をした土製品で、長軸方向の上下両端にくぼみがつけられている。時期は、中段階に比定される。27は、三浦市間口東洞穴2号土坑から出土している環状土製品である。上部には小穴が穿たれており、側面中央部には1条の溝が巡らされている。

2. 骨角製品

ここでは称名寺式期の骨角製品(第7図21~25)について非常に簡単にであるが、概要を記した。また、骨角製品のほとんどが貝塚出土の遺構外遺物であるため、本項では遺構外遺物を取り扱うこととした。各段階への設定は、同一貝層から出土している土器を基準とした。第7図21は、間口東洞穴から出土している鹿角製の遺物である。先端部には切り込みが多く付けられている。22~24は、横浜市金沢区称名寺I貝塚から出土している釣り針、鉛先などの骨角製品である。称名寺I貝塚からは、これら以外にも多くの骨角製品が出土しており、そのほとんどが漁労具である。25は、称名寺I貝塚出土の貝製品である。二枚貝の縁辺部を刃部として使用している。時期は、中・新段階に比定される。分布は、県東部に集中する。 (岡 稔)

土器片錐  1 稲荷山貝塚 2 称名寺 (I 貝塚区) 3 称名寺 (参道区) 4 篠原大原 2住 5 篠原大原 92住
土製円盤  6 篠原大原 3 土坑 7 篠原大原 2住 8 称名寺 (I 貝塚区) 9 青根上野田 J 11 焼土址 10 当麻 6住
ミニチュア土器  11 稲ヶ原A B 4住 12 稲ヶ原A B 4住 13 稲ヶ原A B 4住 14 関谷島ノ神西 3住 15 関谷島ノ神西 3住 16 関谷島ノ神西 5住 17 姥子峯 15住 18 山田大塚 土坑 19 水窪 1住 20 水窪 1住
骨角製品  21 間口東洞穴 22 称名寺 I 貝塚 23 称名寺 I 貝塚 24 称名寺 I 貝塚 25 称名寺 I 貝塚
その他の土製品  26 水窪 1住 27 間口東洞穴

第7図 称名寺式期の土製品・骨角製品 (S = 1/4)